

ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』

— クルーソーの合理的性質とその周辺 —

井 石 哲 也

Robinson Crusoe (1719) が作品として持つ意味については、これまで様々な角度から解釈がなされてきている。たとえば、この作品の背景と解釈についての問題点を単著にまとめた、パット・ロジャーズ (Pat Rogers) はカール・マルクス (Karl Marx, 1818–83) の『資本論』 (*Das Kapital*, 1867) との兼ね合いからホモ・エコノミクス (経済人) としてのクルーソーの側面を、そしてピューリタンの性質との関係から宗教人、つまりはピューリタンの典型としてのクルーソーの姿、そしてそのアレゴリーとしての意味についての章をもうけている。¹ ポール・ハンター (J. Paul Hunter) やスター (G. A. Starr) は、作品を当時流行した精神 (信仰) 的自叙伝 (spiritual autobiography) や悔恨の物語の系譜のなかにとらえて、宗教的意味を寓意として盛り込むという18世紀の小説に見られる特質との関連性からこれを論じて注目された。² またジョン・リチェッティ (John Richetti) はデフォーのフィクションが歴史的、伝記的研究からでは説明がつかないようなエネルギーを有しているという印象から、作者の創造力が作品に与えている統一性の根拠を探ろうとして、エゴセントリックともいえる自我をもったクルーソーの人物像を読みとっている。³

¹ Pat Rogers, *Robinson Crusoe* (London: George Allen & Unwin Ltd., 1979), pp. 51–91.

² Paul J. Hunter, *The Reluctant Pilgrim: Defoe's Emblematic Method and Quest for Form in "Robinson Crusoe"* (Baltimore, Md.: Johns Hopkins Press, 1966), G. A. Starr, *Defoe and Spiritual Autobiography* (Princeton: Princeton University Press, 1965), pp. 74–125.

³ John Richetti, *Defoe's Narratives: Situations and Structures*. (Oxford: Clarendon Press, 1975), pp. 21–62.

いずれにしても、デフォーが作品に盛り込んだ問題は単一、かつ同じレベルのものではないと考えて作品を読む方が混乱を招かないかもしれない。クルーソーの存在感が、無人島での生活という極限状況において発揮されている活発な生産的行動によって与えられていることは間違いのないとしても、この作品においてデフォーが創造した人物像は、経済人クルーソー一辺倒といったものではない。そこで筆者が興味を持つのは、この合理的性質の他にクルーソーの行動の裏に見えかくれしている特質が、これと具体的にどのように関連し、結果としてクルーソー独特の *identity* が形成されているかという点である。本稿ではこの点を中心に、クルーソーの人物像を考察してみようと思う。

I クルーソーと社会

クルーソーが無人島での生活を始めるまでの物語の発端部分は、彼の未来を暗示するかのようになり、きわめて特徴的に描かれている。クルーソーが生まれ育った社会的環境は、船乗りになって旅に出たいという願望や、冒険をして海外での成功を望む気持ちを許さないものであった。つまりそこには、中流階級に身をおいて安楽で平和な暮らしをすることこそが人間の真に幸福な姿であるという、彼の父親の言葉にも代表される考え、またそれが神の摂理でもあるという概念が存在していたわけである。

... That the middle Station of Life was calculated for all kind of Virtues and all kinds of Enjoyments; that Peace and Plenty were the Hand-maids of a middle Fortune; that Temperance, Moderation, Quietness, Health, Society, all agreeable Diversions, and all desirable Pleasures, were the Blessings attending the middle Sta-

tion of Life.⁴

また、ハル (Hull) から乗った船の船長もクルーソーに次のように忠告する。

... Young man, says he, you ought never to go to Sea any more, you ought to take this for a plain and visible Token that you are not to be a Seafaring Man. Why, Sir, said I, will you go to Sea no more? That is another Case, said he, it is my Calling, and therefore my Duty; but as you made this Voyage for a Trial, you see what a Taste Heaven has given you of what you are to expect if you persist. ... if you do not go back, where-ever you go, you will meet with nothing but Disasters and Disappointments till your Father's Words are fulfilled upon you. (i. p. 15)

クルーソーの所属する社会においては、「自分の生まれついた身分」(“the Station of Life I was born in” (i. p. 4)) は固有のものとしてその個人を規制しているというのが当然の概念であったにもかかわらず、クルーソーはこれを無視して船出する。したがってそれは単に父親に対する反抗のみならず、その世界においては神の意志に反抗するに等しいことになった、というわけである。

このように既成の社会通念を嫌い、それから脱却しようとする意志を持

⁴ Daniel Defoe, *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe In The Shakespeare Head Edition of the Novels and Selected Writings of Daniel Defoe*. 14 vols. (1927; rpt. Oxford: Basil Blackwell, 1974), i. p. 3. 以下、本稿における『ロビンソン・クルーソー』からの引用は全てこの版により、引用文の末尾に巻数と頁数を記す。

った人物像は、他のデフォーのフィクションにも見られる。たとえば、それは『疫病年日誌』(A *Journal of the Plague Year*, 1722)において、ペストという極限状況下に置かれて、ロンドンに留まるべきかあるいは逃れるべきかという選択に迫られた結果、とりあえずは自分の運命を神にまかせつつ、その摂理の意味を問いながら物語を生々しく描写していく主人公の馬具商人 H. F. の姿にも似ている。H. F. は疫病は神が人間世界に下した罰であるという、一般に受け入れられていた概念を持ちながらも、疫病から逃れる手段を求めて、自分の身に起こる事件に適切に対処しながら勇敢に生き延びていく。そして主人公が疫病の実態を見きわめようとして示す強い好奇心と、その鋭い観察力が存在感のある人物像を読者に印象づけている。⁵ 物語の導入部分において、「神の摂理」がきっかけとなってプロットが展開していくパターンが両作品に共通に見られるのは興味深いことである。⁶ それと同時に、物語が個人対社会という大きな枠組みを基本として進行していくことを読者に意識させることにもなっているのである。

II クルーソーにおける合理性

この後、無人島に漂着し、社会から遠く隔てられた環境に身を置くことになったクルーソーはすぐに自己の優れた資質を発揮し始める。先ず漂着直後の彼の行動に注目してみよう。クルーソーは自分の乗っていた船が座礁しているのを発見し、島から船までは1マイル足らずの距離であることから、さっそくこれから生き延びていくために必要な物品の採取に乗り出すことになる。

⁵ 拙稿「ダニエル・デフォー『疫病年日誌』—その小説技法について—」(活水女子大学・短期大学 活水論文集第35集英米文学・英語学編, 1992), pp. 101-119.

⁶ 榎本 太『ドン・キホーテの影の下に—十八世紀イギリス小説の諸相—』(中教出版, 1980), pp. 105-107. 氏は十八世紀イギリス小説の形態の特徴として、「神の摂理」が主要な「導き」になっていることを指摘している。

...with the Carpenter's Saw I cut a spare Top-mast into three Lengths, and added them to my Raft, with a great deal of Labour and Pains, but hope of furnishing my self with Necessaries, encourag'd me to go beyond what I should have been able to have done upon another Occasion. (i. pp. 55-56)

実際、船には数々の物資が使える状態に残っており、それらをことごとく運び出すのである。ところがこの船も一夜の嵐によって流され、跡形もなくなってしまう。これを見た時のクルーソーは次のような反応を示している。

But I was gotten home to my little Tent, where I lay with all my Wealth about me very secure. It blew very hard all that Night, and in the Morning when I look'd out, behold no more Ship was to be seen; I was a little surpriz'd, but recover'd my self with this satisfactory Reflection, *viz.* That I had lost no time, nor abated no Dilligence to get every thing out of her that could be useful to me, and that indeed there was little left in her that I was able to bring away if I had had more time. (i. p. 65)

このようにクルーソーには自分がこれで完全に孤立してしまったという意識はなく、ただ単に「少しびっくりした」という程度の反応しか示していない。むしろ、物を運び出せたことに対しての安堵感や満足感があるといってもいいくらいである。つまりこの状況において船は、彼の目には、ひょっとしたら自分を無人島から救い出してくれる役割を果たすという本来の船のヴィジョンとしてではなく、これから生き延びていくために必要な

物資を提供してくれる対象としてのみとらえられていたということである。ここに表れているクルーソーの価値観は彼に固有な性質を象徴的に示すものと考えてよいと思う。彼の意識の中にあっただのは、孤独な状態におかれたという、感傷的な気持ちではなかったのである。

こうしてクルーソーは次々と創意工夫をこらし、持ち前の忍耐力と労働力で自分の望むものを獲得してゆく。それは住居や家具の制作、穀物の栽培、山羊の飼育（肉とミルクを得るため）、衣服や器具の製作といったさまざまな行為において確認され、読者の共感を呼ぶのである。

It might be truly said, that now I work'd for my Bread; 'tis a little wonderful, and what I believe few People have thought much upon, (*viz.*) the strange multitude of little Things necessary in the Providing, Producing, Curing, Dressing, Making and Finishing this one Article of Bread. (i. pp. 135-136)

またおもしろいのは、クルーソーが、思いつき（発想）→計画→準備→実行という合理的プロセスに従って能力を発揮している一方で、いったん事を実行にうつしてしまうと、計画そのものの欠陥には気がつかなくなるという性質を見せていることである。たとえば、長期にわたる作業の末にボートを完成させながらも、それをどうやって入り江まで移動させるかについての方法を考えることを忘れていたために苦労が水の泡になってしまう話などはその典型であり、読者の苦笑を誘うものとなっている。この作品は、もともとフィクション (Fiction) として書かれたにもかかわらず、出版当時は事実の記録 (Fact) として出版され、それが一般に信じられていたということがあるのだが、そのような場合にこうした性質がつけ加えられることは、かえって物語の真実らしさが増し、主人公のリアリティー

が読者に印象づけられるという点で、きわめて効果的な手法であったといえる。⁷

また、クルーソーが自己の資質を最大限に発揮するために、理性を必要な要素として考えていたことにも言及しておくべきかもしれない。生活に必要な物品として椅子とテーブルをつくった際に彼は次のように述べている。

... as Reason is the Substance and Original of the Mathematicks, so by stating and squaring every thing by Reason, and by making the most rational Judgment of things, every Man may be in time Master of every mechanick Art. (i. p. 77)

厳密に言えば、ここでは「理性」という語の定義ははっきりと示されていないというべきである。ただし、合理的に物事に対処し、求める成果をあげるのを可能にするために必要な堅固な意志力が、すなわち「理性」であるとクルーソーに認識されていたと解釈すれば、これをクルーソーが持っている合理的性質に属する一部分として理解できるだろう。以上がクルーソーに最も深く根ざしている特徴である。

⁷ 拙稿「英国小説の勃興—Defoe における Fact と Fiction—」(活水女子大学・短期大学 活水論文集第33集 英米文学・英語学編, 1990), pp. 55-69. デフォーは人間がよく無意識におかしがちな誤りや思い違い、あるいはまぬけな行動をエピソードとして描く。『大佐のジャック』(*Colonel Jack*, 1722) に出てくる、ふとした失敗の例。大きな札束を盗んだジャックは、同僚の不良少年がそれを横取りするのではないかと考えて、路傍の樹のくぼみに札束を隠す。ところが実はそのくぼみは奥深くで、ずっと中の方へ札束が落ちてしまう。棒切れを使って札束を釣り上げようと一生懸命になるがうまくいかない。諦めかけた時に、その樹の根元に穴があいており、そこに札束が落ちている。これに気づいて狂喜するジャックの姿は、なるほどありそうなことと読者を楽しませる。Daniel Defoe, *The History of Colonel Jack* *The Shakespeare Head Edition*, i. pp. 27-29.

Ⅲ 孤 独 感

それでは、クルーソーが発揮する合理性の裏側にはどのような性質が見いだせるだろうか。無人島に流され、もとの文明社会から切り離された彼の境遇からすれば先ず孤独感が考えられるだろう。すでに述べたような漂着直後の心境はともかくとして、生活が安定に向かっても孤独の状態が意識されないはずはないと思われるからである。次にクルーソーが日記 (Journal) の中で孤独について述べている箇所を引いてみよう。

Before, as I walk'd about, either on my Hunting, or for viewing the Country; the Anguish of my Soul at my Condition, would break out upon me on a sudden, and my very Heart would die within me, to think of the Woods, the Mountains, the Deserts I was in; and how I was a Prisoner, lock'd up with the Eternal Bars and Bolts of the Ocean, in an uninhabited Wilderness, without Redemption: In the midst of the greatest Composures of my Mind, this would break out upon me like a Storm, and make me wring my Hands, and weep like a Child. (i. p. 130)

...I whose only Affliction was, that I seem'd banished from human Society, that I was alone, circumscrib'd by the boundless Ocean, cut off from Mankind, and condemn'd to what I call'd silent Life. (i. pp. 180-181)

これらの表現から孤独の切実さが実感としてどれほど読者に伝わってくる

かということが少々気になるのだが、とにかくクルーソーにとって孤独はこのように意識されている。⁸ また、他にもクルーソーの孤独感が無意識に表れていると解釈できる部分がある。それは彼が最初に建てた住居のほかにもう一つ、あずまや (Bower) を建てたということに関係している。クルーソーは島に流れ着いた当初はある岸壁の下に住居を定めて暮らしているが、そのうちに移住を思い立ち、島の反対側に位置する場所に別の住居を完成させている。彼の言葉によれば、元の住まいからは地震の恐怖のために移住を考えたということになるが、あずまやを完成させた後は元の住まいを荷物を貯えて置く場所として、あずまやの方は息抜きの場として使うようになっている。地理的には、この土地は大変良い気候に恵まれていたという理由があるのだが、クルーソーにとってはこれが生活のための雑用から離れて疲れをいやす、快適な、いわば別荘としての役割を果たしているという解釈も出来ると思う。そのあたりの記述を引用してみる。

At the End of this March I came to an Opening, where the Country seem'd to descend to the West, and a little Spring of fresh Water which issued out of the Side of the Hill by me, run the other Way, that is due East; and the Country appear'd so fresh, so green, so flourishing, every thing being in a constant Verdure, or Flourish of *Spring*, that it looked like a planted Garden. (i. p. 114)

⁸たとえば、ヴァージニア・ウルフは小説の細かな描写については、そのリアリズムを高く評価しながらも、クルーソーの内面については、“there is no solitude and no soul”と述べている。Virginia Woolf, *The Common Reader, Second Series* (London: The Hogarth Press, 1948), p. 54. またレズリー・スティーヴンも “Defoe . . . gives a very inadequate picture of the mental torments to which his hero is exposed.”と好意的な見方をしていない。Leslie Stephen, *Hours in a Library* (1892) In Pat Rogers ed., *DEFOE: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1972), p. 174.

...I found that Side of the Island where I now was, much pleasanter than mine, the open or *Savanna* Fields sweet, adorn'd with Flowers and Grass, and full of very fine Woods. I saw Abundance of Parrots, and fain I would have caught one, if possible to have kept it to be tame, and taught it to speak to me. (i. p. 125)

クルーソーの記述には風景描写がきわめて少ないということから判断して、ここに描かれている草花などは、やはり大変美しいものとして彼の目に写ったに違いないと想像される。こうした意味で、あずまやの建設はクルーソーが孤独感をまぎらわすための無意識下の欲求の表れであったとみることが可能であると思う。さて以上のようなクルーソーの孤独感は、確かに彼自身によって述べられ、また認識されているわけだが、その記述が単調で、クルーソーの心の痛みというものが今一つ読者に痛切に伝わってこないような印象を受けるのは筆者だけであろうか。孤独感に襲われつつもすぐに生産的状态を取り戻してゆく姿を繰り返し読むにつけ、彼が旺盛な生産性の裏に抱えているであろう苦悩の実態とはいったい何であろうと考えさせられる。

IV 摂理と矛盾

クルーソーが時折陥る不安定な状態は、彼自身が孤島での生活を余儀なくされたそもそもの理由を、本論の初めに述べたような、自分が父親の忠告と社会通念に背いた結果と思うことから始まっている。そしてそれを克服する方法となったのは聖書を読み、信仰を深めて心の安らぎを得ることであった。彼が神の存在について意識し始めたのは漂着後一年足らず、大麦の種を発見してこれを、「神がただひたすら私を助けようとして恵んで

くれたもの」(“the pure Productions of Providence for my Support”(i. p. 89)) と考えた時であろう。その後クルーソーは病気と回復などを経験して祈りを捧げるようになり、次第にその教えに従っていく。

... As for my solitary Life it was nothing; I did not so much as pray to be deliver'd from it, or think of it; It was all of no Consideration in Comparison to this. (i. p. 111)

... Thus I liv'd mighty comfortably, my Mind being entirely composed by resigning to the Will of God, and throwing my self wholly upon the Disposal of his Providence. (i. p. 156)

ここでは神への信頼が、精神的に不安定な状態を克服するために必須なものであることが示されている。以前に彼が述べていた「魂の苦悩」と、心の平静を取り戻して生活を切り開いていく様は明確な対照をなしている。このような形で示される宗教性がハンターらの指摘したような「精神的自叙伝」の特徴である。すなわち、父親（ひいては社会）への反抗（Rebellion）によって神の罰を受け（Punishment）、無人島での生活を余儀なくされ、そしてその苦悩のなかで信仰心にめざめて過去の自分の行動を悔い改め（Repentance）、精神的な救いと平静を得て（Deliverance）最終的には島を脱出する、という方向にクルーソーを向けていく枠組みである。この反抗はのちに、自分が犯した「原罪」（Original Sin (i. p. 225)）という意識としてクルーソーにとらえられるようになり、彼の心の安定を乱す要因となる。また物語のいわばサブプロットの役割も果たしていく。

ただこの段階に至っても読者の疑問は完全に解消されないかも知れない。それは、孤独感の記述の一部にある、「魂の苦悩」という意識の内容

がさらに立ち入って詳しく語られていないということ、また社会の習いに従わずに船乗りになって旅に出る願望を許されなかったことに対しての論理的説明が彼自身においてはなされておらず、クルーソーが相変わらずそれを「原罪」として背負い、その対処に悩んでいるからである。

この問題を考えるためには、クルーソーの意識下の表現ではなく、無意識下の心の動きが表れている箇所を検討してみる必要がある。そこで物語のほぼ中間あたりで、クルーソーが海岸の砂の上に人間の足跡らしきものを見つけてまさに青天の僻歴ともいふべき驚きをみせる有名な場面を例にとって考えてみる。

It happen'd one Day about Noon going towards my Boat, I was exceedingly surpriz'd with the Print of a Man's naked Foot on the Shore, which was very plain to be seen in the Sand: I stood like one Thunder-struck, or as if I had seen an Apparition; I listen'd, I look'd round me, I could hear nothing, nor see any Thing; I went up to a rising Ground to look farther; I went up the Shore and down the Shore, but it was all one, I could see no other Impression but that one, I went to it again to see if there were any more, and to observe if it might not be my Fancy; but there was no Room for that, for there was exactly the very Print of a Foot, Toes, Heel, and every Part of a Foot; how it came thither, I knew not, nor could in the least imagine. But after innumerable fluttering Thoughts, like a Man perfectly confus'd and out of my self, I came Home to my Fortification, not feeling, as we say, the Ground I went on, but terrify'd to the last Degree, looking behind me at every two or three Steps, mistaking every

Bush and Tree, and fancying every Stump at a Distance to be a Man; nor is it possible to describe how many various Shapes affrighted Imagination represented Things to me in, how many wild Ideas were found every Moment in my Fancy, and what strange unaccountable Whimsies came into my Thoughts by the Way.

When I came to my Castle, for so I think I call'd it ever after this, I fled into it like one pursued; whether I went over by the Ladder as first Contriv'd, or went in at the Hole in the Rock, which I call'd a Door, I cannot remember; no, nor could I remember the next Morning, for never frightened Hare fled to Cover, or Fox to Earth, with more Terror of Mind than I to this Retreat. (i. pp. 177-178)

ここでクルーソーが真っ先にとった行動が、自分の「城」に逃げ帰ったとの記述から事細かに語られているのは意味のあることと言いたい。なぜなら今まで安定した生活において使っていた「家」という呼び名をここで「城」と認識し直すほどの衝撃を受けているからである。クルーソーは初めはこれを悪魔の仕業と考えてみたが、次には野蛮人にちがいないと思い直す。聖書によって信仰を深めつつあったクルーソーにとって、この思考の順序は当然であったかも知れない。ただこの場における彼は我を失っている。

Thus my Fear banish'd all my religious Hope; all that former Confidence in God which was founded upon such wonderful Experience as I had had of his Goodness, now vanished, as if he that had fed me by Miracle hitherto, could not preserve by

his Power the Provision which he had made for me by his Goodness. (i. p. 180)

ここでは不安と恐怖だけがクルーソーを支配している。またこうした状況下でクルーソーが足跡の存在を最終的に人間と判断していることは、漂着当初に自己防衛を最重要課題としたことと同じ思考パターンをみるようで興味深いと思う。何者かは解らずとも、とにかく人間との出会いが現実のものとなれば、何らかの助けが得られるかも知れないという発想はない。事実この後、クルーソーは苦勞して育てた山羊を囲いから逃がし、麦畑を掘り起こして元の荒れ地の状態に戻し、人間が島に住む痕跡を消すことによって身の安全を守ろうと懸命になっている。今までの生活において合理性を発揮しつつ島を文明化し、精神的には信仰を深め、「神の摂理」が支配する意識の中にあったクルーソーにとって最も恐れるべき相手であったのは、他の何者でもない、自分の命と持ち物を奪うかも知れない、現実世界における、それもまだ姿をみせていない人間であったことがここで初めてはっきりしてくる。その意味でも、クルーソーが無意識のうちに次第に本来の性質を露見させたこのエピソードの意味は大きいと言わなくてはならないだろう。そして人間の存在を暗示する事件後、無人島生活24年目にフライディ (Friday) が現れるまでの8年間、不安は常にクルーソーにつきまとい、物語は一種のサスペンスの性質を帯びていくことになるのである。

宮崎孝一氏は、クルーソーの「摂理」に対する態度の曖昧さが、本来欲していた行動を生じさせた例として、蛮人殺害の一件を挙げている。⁹ 漂着18年目にクルーソーは、蛮人が人間を食べた跡のどくろなどの人骨を発見

⁹ 宮崎孝一『ダニエル・デフォーアンビヴァレンスの航跡ー』（研究社出版、1991）、pp. 145-146.

する。これを機に彼は蛮人に攻撃を加える体制づくりに取りかかるが、その後数年にわたって何事もない状態が続くと、その行動が主義として正しいものではないという判断をして、これを断念するにいたる。

Upon the whole I concluded, That neither in Principle or in Policy, I ought one way or other to concern my self in this Affair. That my Business was by all possible Means to conceal my self from them, and not to leave the least Signal to them to guess by, that there were any living Creatures upon the Island; I mean of humane Shape. (i. p. 200)

つまり、安定状態にあるクルーソーは彼独自の「理性」の判断によって、これを合理的ではないと結論したのである。しかしフライディと出会った後の27年目にクルーソーは蛮人の攻撃にさらされる。この時は前回とは違い、蛮人たちは白人の（ヨーロッパ人に見える）捕虜をしたがえており、自分が蛮人を殺す必然性について再度判断を強いられる。クルーソーはこの事に気づいて激怒し、最終的に彼らを撃ち殺してしまう。そしていけにえになるはずだった男を助けてみると、それがフライディの父親であったというおちになるのだが、クルーソーの内面において一応決着したように見えた神への信仰とその摂理に基づいたはずの決定が彼の自我によって打ち砕かれる様が描かれている事実は見逃せない。

クルーソーにとっての「摂理」は、生産的な状態にある限りは、持ち前の判断力や行動力を最大限に発揮するための助けとなる役割を果たしているものの、根本的に彼の自我を抑え込むことには寄与せず、彼は必然的に自己矛盾に陥り、自分を不活発な状態にしてしまうという傾向を示すことになっている。その結果、クルーソーは悔い改めを常に繰り返すことによ

って、もとの生産的状態を取り戻さなくてはならないのである。

V クルーソーの人物像

このように考えてみると、孤独にも耐え、絶え間ない生産を続けてそのあげくにフライディを得て「神の摂理」についての認識が深まっていくプロセスがサブプロットとして描かれていく一方で、クルーソーに固有なさまざまな欲求も変わらずに、それがむしろ強い意識となって内在していったということがわかる。クルーソーは常に望む成果をあげるために、自分自身の生産的な状態を維持しようとしている人間である。そのために、実際に起きる事件に適切に対処しようとする行動を繰り返すたびに、心の奥底にある自我が表にあらわれてくる。クルーソーは環境的には社会から完全に切り離された自由な個人であったはずだが、自分の自由な意志に基づいて行動をおこそうとすると、自分が育った社会の秩序観に歯止めをかけられ、合理的性質と宗教性はクルーソーの内面において対立する意識のまま混在し、彼を非生産的な状態に追い込んでしまうのである。

この両要素が微妙に入り交じる結果になったのは、すでに述べたような「神の摂理」に導かれるプロットの展開が作品構成の枠組みになっていることにも関係がある。榎本太氏は、このような構成をとる小説の特徴として、主人公が試練を克服して最後に再び幸福な状態に復するパターンにおいて、小説の中央部が「折り返し点」として重要な役割を果たすと指摘している。¹⁰ それは本作品では、すでに本論で検討したように、人間の足跡を発見するエピソードであった。そしてこの事件をきっかけにして、それ以来クルーソーがフライディを見だし、彼に宗教の教育を施しながら共に神の恩寵の意味を問い、クルーソー自身の信仰が深まっていくのと同様

¹⁰ 榎本, pp. 106-107.

に、彼の島からの脱出を実現させるプロットに結びついていくわけである。これは作者デフォーが作品をこのような形に落ちつかせるために、どうしても用いなければならなかった構成上の手段であったと考えても不自然ではない。しかしその反面で、クルーソーの合理性を支える自我は、物語において「摂理」の理解と両立していくような印象を与えつつも、実際は常に対立しながら完全に消化されないままになっていることは否定できない。さらに、物語の進行と共にクルーソーの自我があまりに巨大化していくために、「摂理」の部分がそれに呑み込まれてしまい、結果的に構成面とのバランスを失ってしまっていると言ってもいいだろう。

以上、クルーソーに見られる合理的性質を軸にして、孤独感、不安や恐怖、またそれらと摂理との関連性などについて考察してきた。これによってはっきりしてくることは、クルーソーは現実の行動においては明らかに物質的に満たされつつ自立した生活の方向へ進んでいるにもかかわらず、自我をはばむ、社会的に獲得した概念から離脱出来ていないことを誰よりもクルーソー自身が認識しているという事実である。そしてそうした矛盾が、あくまで自分の資質を最大限に発揮して目標を達成しようとするクルーソー自身の欲求と衝突する形でくりかえされる。だがそれでもなお、クルーソーは自我に基づいて行動しようとする。ここにクルーソーは主人公としてより確実に強烈な *identity* を与えられることになっていることも確かではないだろうか。そしてそれが自己の資質を最大限に発揮しなければならぬ無人島漂着という状況に置かれた場合にもっとも端的な形で表れていることは言うまでもない。読者がクルーソーという人物から受ける存在感と *vitality* というものが、単に彼が示す経済人的資質によるものだけではないとすれば、それはこのようなところに理由があると言えそうである。物語の設定としては、クルーソーは空間的に社会と隔たった環境に置かれたわけだが、実際に描かれているのは、社会を意識の中から捨て

去ることの出来ない個人のあり方と、そのような状況のなかにおける人間の可能性である。そしてこれは神意に対する人間の言動のあり方といった問題を越えたものとしてクルーソーただひとり媒体として示されているのである。イアン・ワット (Ian Watt) は著書、『小説の勃興』 (*The Rise of the Novel*) の中で次のように述べている。

The relative impotence of religion in Defoe's novels, then, suggests not insincerity but the profound secularisation of his outlook, a secularisation which was a marked feature of his age—the word itself in its modern sense dates from the first decades of the eighteenth century.¹¹

この物語に盛り込まれている精神 (信仰) 的自伝としての側面が、宗教的というよりはむしろ、かなり道徳的にさえ感じられるのはこうした時代の傾向を裏付けることにもなる。『ロビンソン・クルーソー』以後、本格的なフィクション創作期に入ったデフォーが『モル・フランダース』 (*Moll Flanders*, 1722), 『大佐のジャック』、『疫病年日誌』、『ロクサーナ』 (*Roxana*, 1724) などにおいて、個人と社会との関係を枠組みとして、様々な問題を取り上げていったことを考えれば、その出発点となった本作品において同じような特徴が見られるのは興味深いことと言えるのではないだろうか。当時は旅行や冒険が流行であり、世間で話題となった、アレクサンダー・セルカーク (Alexander Selkirk, 1671–1721) という人物のファン・フェルナンデス (Juan Fernandez) での無人島生活を作品の題材にとるといふ、時機を得た執筆の背景ともあいまって、作品が広い読者層に歓迎され

¹¹ Ian Watt, *The Rise of the Novel: Studies in Defoe, Richardson and Fielding* (London: Chatto & Windus, 1957), p. 82.

たことも作品には幸運なことであったといえるだろう。¹²

また以上のような考察から、クルーソーが無人島の生活で磨いた能力は、彼がふたたび戻ることになった現実の社会においてどういう意味をもつことになるのか、そしてその資質は発揮され得るのかという興味も出てくる。その疑問に対する回答の試みがデフォーに本作品の続編を書かせる動機ともなったであろう。「小説」という文学上のジャンルがまだ十分に確立されていなかった時期に、強烈な主人公の個性と社会的意識を盛り込んだフィクションとして出版された本作品の意味は大きかったと、改めて思わざるを得ない。

1993. 2. 1. 受理

¹² Rogers, pp. 17–20, 155–162.